文學博士　久松[illegible]一

日本精神歌集

日本精神叢書　八

日本精神歌集

文學博士　久松潛一

一、本叢書は、主として我國古來の典籍中より精神教育上適切なるものを選擇してその要點を解說し、廣く國民をして日本精神の心解と體得とに資せしむることを以て目的とするものである。

一、本篇は、東京帝國大學教授文學博士久松潛一氏に委囑し、執筆を煩したものである。

本篇は、昭和十年二月文部省思想局に於て發行したものであるが、今般本局に於て之を增刷するものである。

昭和十四年三月

教學局

目次

日本精神歌集

一　序説

日本精神に關する歌を集めて見るに當つて、日本精神の内容によつて、歌を集めて見ることも一の態度であるが、こゝでは時代にわけてその特質にふさはしい歌をえらんで見たい。日本精神は日本人の自覺的特性のすべてを含むものであるから、日本精神といふ立場から和歌をえらぶとすれば、すべてをそれであるといつてもよいほどである。しかしこゝでは限られた量の中に各時代のすべてにわたつて日本精神歌集をあむ必要上、敬神、忠君、愛國の精神を中心としてうたはれた歌のみに限り、まゝ親子の愛をうたつた歌を加へることにした。かういふ立場からする時、和歌史の上でも是等の精神が非常に強くうたはれた時代と然らざる時代とがある。うたはれた時は國歩艱難の時期が多く、うたはれない時期はむしろ平和の時期が多い。事ある時に於て國民の忠君愛國の精神は一層力強く現れてくるのであり、それ

が自ら和歌にも見られるのである。このさゝやかな選集の中にも日本精神の核心を見出し得るであらう。

二　大和時代の和歌と日本精神

神代から奈良朝の終りまでの和歌であるが、古事記、日本書紀の歌謡と萬葉集とが、その中心をなして居る。記紀歌謠時代の詩歌はまだ定型をなさないものも多く、萬葉集時代に入つては長歌、短歌、旋頭歌といふ歌體が定まつたが、しかしなほ短歌は中心をなして居る。しかし平安時代以降に比して長歌等の長形式の歌がよまれたのは大きな特質であり、短歌で表現し得ない雄大な國家思想も見られるのである。殊に柿本人麿の歌の如きは古事記、日本書紀、祝詞と同じ神の信仰を歌に表現して居る所に注目されるものがあり、儒教思想の影響をうけた山上憶良にしても、傳統的な神國思想を中心にして儒教思想と調和させて居る所に意義がある。日本精神を中心とする詩歌としても大和時代はその源泉として、それ以後の根柢となつて居るのである。

神武天皇の聖業は申すもかしこし、御製にも長髄彦御征討の際の勇武な御歌がある。

神武天皇

登美毘古を擊ち給はむとせし時の大御歌

みつみつし久米の子らが粟生にはか韮(みら)一もと其根(そね)がもと其(そ)ねめつなぎて擊ちてしやまむ（古事記神武天皇卷）

（註）「其ねめつなぎて」はその「ね」と「め」とする說もあるが「其のめ」と見て、その根とその芽とをつないで、擊つてしまはうといふ意味である。

又歌曰

みつ〳〵し久米の子らが垣下にうゑし薑(はじかみ)口疼(ひゞ)く吾れは忘れじ擊ちてし止まむ（同）

（註）薑は前歌の「か韮」と同じく、雜草である。

又歌曰

神風の　伊勢の海の　大石に　はひもとほろふ　しただみの　いはひもとほり　擊ちてしやまむ（同）

（註）「しただみ」は貝類の一種。「いはひもとほり」は這ひまはる意。

景行天皇の皇子。御東征御西征の英雄的御事業を行ひ給ふ。

日本武尊

倭は國のまほろばたゝなづく青垣山こもれる倭しうるはし（古事記景行天皇卷）

（註）「國のまほろば」は國の中心をさす。尊が薨去されんとして倭の美しさをたたへられたのである。

命の全けむ人は疊薦平群の山のくま檮が葉を髻華にさせその子

此歌者思國歌也

（註）疊薦は平群の枕詞、くま檮の葉を頭のかざりにして樂しく遊ぶことを生けるものにすゝめたのである。思國歌は歌の内容からつけられた名。

又歌曰

愛しけやし吾家の方よ雲ゐ起ち來も

此歌者片歌也（古事記景行天皇卷）

（註）片歌は歌の形態から來た名で、他の歌と一になつて一首となるのである。

應神天皇

ちばの葛野を見ればもゝちだる家庭も見ゆ國のほも見ゆ（古事記應仁天皇卷）

（註）敍景詩としては素樸であるが、如何にも大きいゆつたりとした所が見られる。

大葉子は、夫に従ひて韓にゆき女丈夫の意氣を示して殺さる。

加羅國の城の上に立ちて大葉子は領巾（ひれ）振らすも日本へ向きて（日本書紀欽明天皇巻）

（註）領巾は古代女性の身につけた薄い巾。

韓國の城の上にたゝし大葉子は領巾振らす見ゆ難波へ向きて（同）

舒明天皇の御製萬葉集巻一の御歌。

天皇香具山に登りて望國（くにみ）しませる時御製歌

大和には　群山（むらやま）あれど　とりよろふ　天の香具山　登りたち　國見をすれば　國原は　煙立ち立つ　海原は　鷗立ち立つ　うまし國ぞ　あきつ島　大和の國は（萬葉集巻一）

（註）「とりよろふ」はすべての點の具足する意。「國見」は天皇が四方の國々をしろしめすこと。鷗は海に居るが、こゝは大和にあつた埴安の池に居る鴨をさしたと見る説がある、帝皇の大きな御精神が見える。

柿本人麿は萬葉集の最も偉大なる歌人。持統天皇、文武天皇の御代の歌人。

吉野宮に幸せる時柿本人麿の作れる歌

やすみしし　吾が大君　神ながら　神さびせすと　芳野川　瀧（たぎ）つ河内に　高殿を　高知りまして　上り立ち　國見をすれば　たたなはる　青垣山　山つみの　奉る御調（みつぎ）と　春べは　花かざし持ち　秋立てば　紅葉かざせ

り　ゆき副ふ　川の神も　大御食に　仕へまつると　上つ瀬に　鵜川を立て　下つ瀬に　小網さし渡し　山川も　依りてまつれる　神の御代かも（同）

反歌

山川も依りてまつれる神ながら瀧つ河内に船出せすかも（同）

（註）「神ながら」は「神の柄」といふ意にとる説と「神なるまゝに」と見る説とがある。何れも神の本體をさして居ることは同樣である。「神さび」も「神成」「神古」といふ文字を用ゐて居るのを見ても、神の完成した意をあらはす、天皇は神の中の神として行ひ給ふといふ意がある。「山つみ」は山の神である。自然の神々が天皇に從ひまつるさまがうたはれて居る。

作者は明らかでない。藤原宮をことほぐ歌。井は水を重んずる思想より重んぜらる。

藤原宮御井歌

やすみしし　わご大王　高照らす　日の皇子　荒栲の　藤井が原に　大御門　始め給ひて　埴安の　堤の上に　在り立たし　見し給へば　大和の　青香具山は　日のたての　大御門に　春山と　しみさび立てり　畝傍の　この瑞山は　日のよこの　大御門に　瑞山と　山さびいます　耳

梨の　青すが山は　そともの　大御門に　宜しなべ　神さび立てり　名ぐはし　吉野の山は　かげともの　大御門ゆ　雲居にぞ　遠くありける　高知るや　天の御蔭　天知るや　日の御影の　水こそは　常にあらめ　御井の清水（卷一）

短　歌

藤原の大宮づかへあれつぐや　處女がともはともしきろかも（同）

（註）「日のたて」「日のよこ」「そとも」「かげとも」は東西南北をさす。御井の四方を現したのである。反歌の意は藤原の大宮づかへを引きつゞいて致して居る處女たちはうらやましいことである意。

山上憶良は奈良朝初期に活躍せる萬葉の代表歌人の一人。儒敎的影響を見る。

山上臣憶良大唐に在りし時本鄕を憶ひて作れる歌

いざ子どもはやく日本へ大伴の御津の濱松待ち戀ひぬらむ（同）

（註）大伴の御津の濱松は九州とも攝津ともいふが、こゝは攝津であらう。

天皇は天智天皇

天皇聖躬不豫の時太后の奉れる御歌一首

天の原ふりさけ見れば大きみの御いのちは長く天足らしたり（卷二）

日並皇子は天武天皇の皇子。皇太子としてやがて天皇の御位につかせらるべき方であつたから、人民の惜み奉ることも深かつた。人麿の神話的信仰が見られる。

日並皇子尊の殯宮の時、柿本朝臣人麿の作れる歌一首幷に短歌

天地の　初の時　ひさかたの　天の河原に　八百萬　千萬神の　神集ひ集ひ坐して　神分ち　分ちし時に　天照す　日靈尊（一に云ふ、さしのぼる日女の命）　天をば知ろしめすと　葦原の　瑞穗の國を　天地の　依り合ひの極　知ろしめす　神の命と　天雲の　八重かき別きて（一に云ふ、天雲の八重雲別きて）　神下し　坐せまつりし　高照す　日の皇子は　飛鳥の　淨の宮に　神ながら　太敷きまして　天皇の　敷きます國と　天の原　岩戸を開き　神上り　上り坐しぬ（一に云ふ、神登りいましにしかば、）　わが大王　皇子の命の　天の下　知ろしめしせば　春花の　貴からむと　望月の　滿はしけむと　天の下（一に云ふ、食國）　四方の人の大船の　思ひ憑みて　天つ水　仰ぎて待つに　いかさまに　思ほしめせか　由縁もなき　眞弓の岡に　宮柱　太敷きまし　御殿を　高知りまして　朝ごとに　御言問はさず　日月の　數多くなりぬれ　そこ故に　皇子の宮人　行方知らずも（一に云ふ、さす竹の皇子の宮人ゆくへ知らにす）（同）

反歌二首

ひさかたの天見るごとく仰ぎ見し皇子の御門の荒れまく惜しも

あかねさす日は照らせれどぬばたまの夜渡る月の隱らく惜しも

（註）「天地のより合の極」は天壤無窮と同樣の永遠をあらはす語、宣命では中今といふ。

大和にある岳

天皇雷岳に遊びまし丶時柿本朝臣人麿の作れる歌一首

皇(おほきみ)は神にしませば天雲の雷(いかづち)の上に廬(いほり)せるかも（卷三）

（註）自然の上に高くしろしめす現御神としての天皇をたゝへまつる思想が見られる。

都を稱へた歌として愛誦さる。

大宰少貳小野老朝臣の歌一首

あをによし寧樂(なら)の都は咲く花のにほふが如く今さかりなり（同）

天平五年の春、遣唐大使多治比眞人廣成に山上憶良が餞した歌。憶良の日本思想が見られる。

好去好來の歌一首、反歌二首

神代より　言傳て來(く)らく　虛(そら)みつ　倭の國は　皇神の　嚴(いつく)しき國　言靈の　幸はふ國と　語り繼ぎ　言ひ繼がひけり　今の世の　人もことごと

目の前に　見たり知りたり　人さはに　滿ちてはあれども　高光る　日の
朝廷　神ながら　めでの盛に　天の下　奏し給ひ　家つ子ら　撰び給ひて
勅旨（反して、大命といふ）　戴き持ちて　唐の　遠き境に　遣はされ　罷り坐せ　海
原の　邊にも奥にも　神留り　領き坐す　諸の　大御神等　船舳に（反して、ふなの
へにと云ふ）　導き申し　天地の　大御神等　倭の　大國靈　ひさかたの　天の
御虚ゆ　天翔り　見渡し給ひ　事了り　還らむ日は　また更に　大御神
等　船舳に　御手打ち懸けて　墨繩を　延へたる如く　あちかをし　値
嘉の岬より　大伴の　御津の濱邊に　直泊に　御船は泊てむ　恙無く
幸く坐して　早歸りませ（卷五）

反　歌

大伴の御津の松原かき掃きて吾立ち待たむ早歸りませ
難波津に御船泊てぬと聞え來ば紐解きさけて立走りせむ

天平五年三月一日　良の宅に對面して獻ることは三日なり　山上憶良

（註）　皇神のいつくしき國、言靈のさきはふ國は一面では言葉の力をみとめると

ともにその上に皇神の御德を示して居る。鹿持雅澄はこの言葉から萬葉集の精神を「皇神の道義」と「言靈の風雅」といふ語で現した。「あちかをし」は「ちか」の枕詞、「ちか」の音からつゞく。「墨繩をはへたる如く」は大工の行で、この頃からかういふ風習があつたことが知られる。

叙事詩人高橋蟲麿の歌として明記あるものの唯一の歌。

四年壬申藤原宇合卿の西海道節度使に遣さるゝ時

高橋連蟲麿の作れる歌一首幷に反歌

白雲の　龍田の山の　露霜に　色づく時に　うち越えて　旅行く君は
五百重山　い行きさぐみ　賊守る　筑紫に至り　山のはて　野のはて見
よと　伴の部を　班ち遣し　山彦の　應へむ極み　谷蟇の　さ渡る極み　國
狀を　見し給ひて　冬ごもり　春さり行かば　飛ぶ鳥の　はやく來まさ
ね　龍田道の　丘邊の路に　丹躑躅の　薫はむ時の　櫻花　咲きなむ時
に　山たづの　迎へ參出む　君が來まさば（卷六）

反歌一首

千萬の軍なりとも言擧せず取りて來ぬべき男とぞ思ふ（同）

（註）「い行きさぐみ」は行きなやむをいふ。「賊守る」は筑紫の枕詞、反歌に於て

は殊に力強い男性的精神が見られる。

天皇酒を節度使の卿等に賜へる御歌一首并に短歌

聖武天皇の御製。御威嚴と愛撫の大御心が拝察される。

食國の　遠の朝廷に　汝等し　かく罷りなば　平らけく　吾は遊ばむ　手抱きて　我はいまさむ　天皇朕が　うづの御手もち　かき撫でぞ　ねぎたまふ　うち撫でぞ　ねぎたまふ　還り來む日　相飮まむ酒ぞ　この豐御酒は（卷六）

反歌一首

丈夫の行くとふ道ぞおほろかに念ひて行くな丈夫の伴（同）

（註）「遠の朝廷」は地方の大宰府などのことをさしたであらう。

天平六年

六年甲戌海犬養宿禰岡麿詔に應ずる歌一首

み民吾生ける驗あり天地の榮ゆる時に遇へらく思へば（同）

天平十五年聖武天皇の御代、一時久邇京に都を遷さる。

十五年癸未秋八月十六日、內舍人大伴宿禰家持久邇京をほめて作れる歌一首

今つくる久邇のみやこは山河のさやけき見ればうべ知らすらし（卷六）

（註）「うべ知らすらし」は、成程、天皇がしろしめしてゐられるのであらうの意。

久邇の新京を讃むる歌

山高く川の瀨清し百世まで神しみ行かむ大宮どころ（同）

柿本朝臣人麿の歌集の歌に曰く

人麿歌集の歌であるから、人麿の若い時の歌か。

葦原の　水穗の國は　神ながら　言擧せぬ國　然れども　言擧ぞ吾がする　言幸く眞さきく坐せと　恙なく　福く坐さば　荒磯波　ありても見むと　百重波　千重浪にしき　言擧す吾は　言擧す吾は（卷十三）

反歌

敷島の日本の國は言靈の佐くる國ぞま福くありこそ（同）

（註）「言靈の佐くる國」と「言擧せぬ國」とは一見矛盾するやうであるが、言葉の力や靈をみとめ、その言靈の偉力をみとめる所から、みだりに實行の伴はない言葉は言はないの意で、兩者同じ思想の上にたつて居る。

佐婆の海中逆風にあつて漂流し幸に順風を得て豐前國に到着してよめる歌の一首。

海原の沖邊に燭し漁る火は明してともせ大和島見む（卷十五）

橘諸兄の歌

左大臣　橘宿禰詔に應ずる歌一首

降る雪の白髪までに大皇に仕へまつれば貴くもあるか（巻十七）

大伴宿禰家持詔に應ずる歌一首

大宮の内にも外にも光るまでふらす白雪見れど飽かぬかも（同）

（註）雪の明るくかゞやくばかりの中に、帝王のしろしめす國の明るさをことほいだのである。

大伴家持の忠君思想・國家思想が見られる。

陸奥國より金を出せる詔書を賀ぐ歌一首幷に短歌

葦原の　瑞穗の國を　天降り　しらしめしける　すめろぎの　かみのみことの　御代かさね　天の日嗣と　しらしくる　君の御代々々　しきませる　四方の國には　山河を　ひろみあつみと　奉る　みつきたからは　數へえず　盡しもかねつ　しかれども　吾が大君の　もろびとを　いざなひ給ひ　よきことを　はじめ給ひて　くがねも　たのしけくあらむと　おもほして　したなやますに　とりがなく　東の國の　みちのくの　小田なる山に　くがねありと　まうしたまへれ　御心を　あきらめたまひ

あめつちの　かみあひうづなひ　すめろぎの　御靈たすけて　遠き世にかかりしことを　吾が御世に　あらはしてあれば　み食す國は　榮えむものと　神ながら　おもほしめして　もののふの　やそとものをを　まつろへの　むけのまにまに　おいびとも　女(め)の童兒も　しが願ふ　心だらひに　撫でたまひ　治めたまへば　ここをしも　あやにたふとみ　うれしけく　いよよおもひて　大伴の　遠つ神祖の　そのなをば　大來目主と　おひもちて　仕へし官(つかさ)　海ゆかば　みづくかばね　山行かば　草むすかばね　大君の　邊にこそしなめ　かへりみは　せじとことだて　ますらをの　きよきその名を　いにしへよ　今のをつつに　ながさへるおやのこどもぞ　大伴と　佐伯の氏は　人祖の　立つることだて　人の子は　祖名(おやのな)絶たず　大君に　まつろふものと　言ひつげる　ことのつかさぞ　梓弓　手にとり持ちて　劒大刀　腰にとりはき　朝守り　夕の守りに　大君の　みかどのまもり　われをおきて　また人はあらじと　いやだて　思ひしまさる　大君の　御言のさきの　聞けば貴み（卷十八）

反歌一首

天皇の御代榮えむと東なるみちのく山に黄金花さく（同）

（註）「海ゆかば」云々の箇所に古歌を引用したのであらう。この歌を引いた所に
この歌の精神も見られる。「今のをつゝ」は「今の現」の意である。

天平勝寶四年十一月文屋智努麿眞人の作。

二十五日新嘗祭の肆宴に詔に應ずる歌

天地と久しきまでに萬代に仕へまつらむ黑酒白酒を（卷十九）

（註）黑酒白酒は神前にそなへる酒。

防人の歌。

今日よりは顧みなくて大君の醜（しこ）の御楯と出で立つ吾は（卷二十）

右の一首は火長今奉部與曾布（いままつりべのよそふ）

大伴家持が大伴家一族をさとす歌。家持の家を重んずる思想が見られる。

族に喩す歌一首幷に短歌

久方の　天の戸開き　高千穗の　たけにあもりし　天皇の　神の御代よ
り　はじゆみを　手（た）にぎりもたし　まかご矢を　たばさみそへて　おほ
久米の　ますらたけをを　先に立て　ゆぎ取りおほせ　山河を　いはね
さくみて　ふみとほり　國求ぎしつつ　ちはやぶる　神をことむけ

まつろへぬ　人をも和し　はき清め　仕へ奉りて　あきつ島　大和國の
橿原の　畝傍の宮に　宮柱　太しり立て　天の下　治しめしける　天皇
の　天の日嗣と　つぎて來る　君の御世々々　かくさはぬ　あかきこゝ
ろを　すめらべに　きはめつくして　仕へくる　祖のつかさと　ことだ
てて　さづけたまへる　うみのこの　いやつぎ〱に　見る人の　語り
つぎでて　聞く人の　かがみにせむを　あたらしき　きよきその名ぞ
おほろかに　心おもひて　むなごとも　祖の名絶つな　大伴の氏と名に
負へる　ますらをのとも（卷二十）

反　歌

敷島の倭の國に明らけき名に負ふ伴の緒こゝろつとめよ（同）

劒たちいよよ研ぐべし古ゆ清けく負ひて來にしその名ぞ（同）

（註）「たけにおもりし」は嶽に天降られた意である。「まかご矢」は「眞鹿兒矢」
である。「明らけき名に負ふ」は大伴氏の名ある家柄をいふのである。

三年春正月一日因幡國廳にて饗を國の郡司等に賜へる宴の歌一首

大伴家持の作、萬葉集最終の歌。

新しき年の始の初春の今日降る雪のいや重け吉事

（註）「吉事」はよき事であり、吉言にも通ずる。壽詞はその意味である。

三　平安時代の和歌と日本精神

平安時代は國家的精神から更に個性的精神の自覺された時代で、國家的精神は表面に餘り現れなかつたやうであるが、なほ種々の場合にその現れに見られる。菅原道眞の如き一朝事に坐して筑紫に貶せられるや、忠君の精神は雄々しく現れてきた。その他平安時代の和歌から父性愛、母性愛の見られる歌は多く、また古今集以降の勅撰和歌集に於ける賀・神祇に關する歌には敬神や忠君の精神の見られる歌が尠くない。たゞ時代は太平の御代がつゞき、大和時代の如き、吉野時代の如き、もしくは近世後期の如き時代とは異にするので、現實に卽してこれ等の精神が力強く現れないに止るのである。こゝには主として古今集以後の勅撰和歌集

の賀・神祇の歌からえらんだ。

題しらず　　讀人しらず

我君は千世に八千世にさゞれ石の巖となりて苔のむすまで（古今集賀歌）

（註）「我君は」は和漢朗詠集の一本に「君が代は」となつて居る。國歌として國民精神の根源となつて居る。

わたつ海の濱の眞砂を數へつゝ君が千年の有り數にせむ（同）

鹽の山差出の磯にすむ千鳥君が御代をばやちよとぞ鳴く（同）

我齢君が八千代にとり添へて留めおきては思ひでにせよ（同）

（註）何れも國家的精神を根柢として忠君思想をうたつて居る。

小野の千古が陸奥のすけにまかりける時母のよめる

たらちねの親のまもりとあひそふる心ばかりは關なとゞめそ（古今集離別歌）

（註）母の愛が見られる歌である。

安倍仲麿

安倍仲麿は支那にわたり、かの地にて重んぜられ、故國に歸らず歿す。

もろこしにて月をみてよみける

天の原ふりさけ見れば春日なる三笠の山に出でし月かも（古今集羇旅歌）

（註）三笠の山は大和にある山。

おほなほびの歌

新しき年の始にかくしこそ千年をかねて樂しきをへめ（古今集大歌所御歌）

日本紀には　つかへまつらめ萬代までに

採物歌

神垣の三笠の山の榊葉は神のみ前にしげりあひにけり

（註）採物は神樂歌の中、儀式的な歌で、物をもつてうたふのである。

君が代は限りもあらじ長濱のまさごの數はよみつくすとも

これは仁和のおほむべの伊勢國の歌

（註）大嘗會の時の御歌である。

大伴黒主

近江のや鏡の山をたてたればかねてぞみゆる君が千年は

これは今上のおほむべの近江の歌

筑波ねのこのもかのもに蔭はあれど君がみ蔭にます蔭はなし（古今集大歌所御歌）

（註）　筑波山の木の茂るのをうたひ、更に君のみかげをたゝへたのである。

冬の賀茂の祭の歌　　藤原敏行朝臣

ちはやぶる賀茂のやしろの姫小松萬代ふとも色はかはらじ

藤原敏行は古今集歌人としてもすぐれて居る。「秋きぬと目にはさやかに見えねども風の音にぞ驚かれぬる」はその詠である。

今上帥のみこときこえしとき、太政大臣の家にわたりおはしまして歸らせ給ふ。御おくりものに御本奉るとて　　太政大臣貞信公

君がためいはふ心の深ければひじりの御代のあとならへとぞ（後撰集賀歌）

（註）「今上」は村上天皇を申し奉つたのである。

東宮の御前に呉竹植ゑさせたまひけるに　　清正

君がため移してうゝる呉竹に千代もこもれるこゝちこそすれ（同）

命婦清子

斧のえの朽ちむもしらず君が代のつきむ限は打ち試みよ（後撰集賀歌）

（註）命婦は五位の女官。

天暦の帝四十になりおはしましけるとき、山階寺に金泥壽命經四十卷を書き、供養し奉りて、御卷數鶴にくはせて洲濱に立てたりけり。其の洲濱の敷物にあまたの歌蘆手に書ける中に　兼盛

山階の山のいはねに松をうゑてときはかきはに祈りつるかな（拾遺集賀歌）

安和元年大嘗會風俗、長柄の山　大中臣能宣

さざなみの長柄の山のながらへて樂しかるべき君が御代かな（同）

延喜御時南殿に散りつみて侍りける花を見て　源公忠朝臣

とのもりのとものみやつこ心あらば此の春ばかり朝きよめすな（同）

（註）散る花に美を見出して、庭守に掃除することをしばし止めた歌。醍醐天皇の御代。

源經信は後拾遺集時代のすぐれた歌人。子に俊頼あり。

承暦二年内裏歌合によみ侍りける　　民部卿經信

君が代はつきじとぞおもふ神風や御裳濯川の澄まむかぎりは（後拾遺集賀歌）

（註）御裳濯川は伊勢の五十鈴川のことをこゝではさして居る。

永承四年内裏の歌合に松をよめる　　能因法師

かすが山岩根の松は君がため千とせのみかは萬代ぞへむ（同）

藤原經衡

ちはやぶる神の園なるひめ小松萬代ふべき始なりけり（後拾遺集神祇歌）

住吉にまゐりてよみ侍りける　　蓮仲法師

住吉の松の下枝に神さびてみどりに見ゆるあけの玉がき

（註）「神さびて」は「神成」の意、神が神として徹するのをいふ。「翁さび」等の場合も同様である。

源俊賴、經信の子。金葉集の撰者。清新な作風を以て著はれて居る。

百首の歌の中に祝の心をよめる　　源俊賴朝臣

君が代は松の上葉におく露の積りて四方の海となるまで（金葉集賀歌）

祝の心をよめる　　大納言經信

君が代の程をばしらで住吉の松をひさしと思ひけるかな（金葉集賀歌）

（註）君が代の長久なるに比ぶれば、住吉の松も比較にならないの意。

實行卿の家の歌合に祝のこゝろをよめる　　藤原爲忠

みづがきの久しかるべき君が代を天照神やそらに知るらむ（同）

前の中宮始めて內へまゐらせ給ひける夜雪のふりて
侍りければ六條右大臣のもとへ遣しける

宇治前太政大臣

雪積る年のしるしにいとゞしく千年の松の花さくぞ見る（同）

かへし　　六條右大臣

つもるべし雪積るべし君が代は松の花さく千度みるまで（同）

松上雪をよめる　　源　家賴

萬代の例と見ゆる松の上に雪さへつもる年にもあるかな（同）

平安時代の新しき歌人。詞の自由と清新なる叙景を以てすぐれて居る。

大納言經信

神垣に昔わがみし梅のはなともに老木となりにけるかな（金葉集雜歌）

一條院の御時奈良の八重櫻を人の奉りけるを、その折御前に侍りければその花を題にて歌よめと仰せごとありければ　伊勢大輔

いにしへの奈良の都の八重櫻けふこゝのへににほひぬるかな（詞花集春歌）

題しらず　曾禰好忠

何事も行きて祈らむと思ひしに神無月にもなりにけるかな（詞花集冬歌）

長元八年宇治前太政大臣の家の歌合によめる　能因法師

君が代は白雲かゝる筑波嶺の峰のつゞきの海となるまで（詞花集賀歌）

としつなにぐして住吉にまうでてよめる

大納言經信

住吉のあら人神のひさしさに松もいくたび生ひ替るらむ（詞花集賀歌）

（註）あら人神は現人神である。

百首の歌めしける時祝の心をよませ給うける

崇徳天皇

吹く風も木々の枝をばならさねど山は久しき聲ぞきこゆる（千載集賀歌）

（註）「吹く風も木々の枝をならさ」ないと言ふのは御代の平和に靜かなるをさしたのである。

後白河天皇の第三皇女。千載集、新古今集時代の最もすぐれたる女歌人にあらせらる。

百首の歌よみ給ひける時の祝の歌　式子內親王

うごきなきなほ萬世ぞ賴むべきはこやの山のみねの松風

（註）はこやの山は仙洞をさすのである。

千載集の撰者。當時の代表歌人。

攝政右大臣に侍りける時百首の歌よませ給ひけるに祝の歌五首が中によみ侍りける　皇太后宮大夫俊成

百千たび浦島が子は歸るともはこやの山は常磐なるべし（千載集賀歌）

百首の歌の中に神祇の歌によみ給ひける　式子內親王

さりともとたのむ心は神さびて久しくなりぬ賀茂の瑞垣

高野の山を住みうかれて後、伊勢國二見浦の山寺に侍りけるに太神宮の御山をば神路山と申す大日如來の御垂跡を思ひてよみ侍りける　　圓位法師

深くいりて神路の奥を尋ぬれば又うへもなき峰のまつ風（千載集神祇歌）

（註）西行の神に對する深い信仰が見られる。

西行法師。平安後期北面の武士から出家となり、四方を週遊して自然にしたしむ。

藤原兼輔

人の親の心は闇にあらねども子を思ふ道にまどひぬるかな（後撰集雜歌）

（註）人の親の子を思ふ愛の深さをうたつたのである。

菅原道眞母

久方の月の桂も折るばかり家の風をもふかせてしがな（後拾遺集雜歌）

菅原道眞

大鏡に所載の菅原道眞の歌。

こちふかば匂おこせよ梅の花あるじなしとて春を忘るな（大鏡）

君が住む宿の梢を行く〳〵とかくるゝまでも顧みしはや（大鏡）
海ならずたゞよふ水の底までもきよき心は月ぞ照らさむ（同）
（註）菅原道眞の家を愛し、君に忠なる心根の現れた歌である。

紀貫之女

勅なればいともかしこし鶯の宿はととはゞいかゞ答へむ（同）

西行法師

神樂二首

めづらしな朝倉山の雲ゐより慕ひ出でたる赤星の影（山家集）
名殘いかに返々も惜からむ其駒にたつ神樂舍人は（同）

御裳濯

初春を隈なく照らす影を見て月に先知るみもすその岸（同）
願はくば花のもとにて春死なんそのきさらぎの望月のころ（同）
（註）西行の生死を超越した心境が見られる。
年たけてまたこゆべしと思ひきやいのちなりけり小夜の中山（同）

（註）小夜の中山は東海道の地名。「いのちなりけり」はながらへてまた越えることの出來るのも天命であるといふのである。

四　鎌倉室町時代の和歌と日本精神

鎌倉室町時代は、平安時代に於て個性が深められたがやがてゆきつまつたのに對して、更に國家の出發點に歸らうとした機運が現れた。そこに平家物語等の軍記物語も現れ、源實朝の萬葉調の歌も現れたのである。武士道と記紀の國家的精神との間には一つのつながりがある。かくて鎌倉室町時代の歌には萬葉集の精神に共通する國民精神の歌が多く見られる。殊に吉野の新葉集の歌には君臣一致して肇國の精神をもとにした御活動が現れて居る。こゝにはさういふ方面の歌を多くえらんだ。一面に鎌倉室町時代の歌には幽玄を中心とする象徴的な歌も多く、それも廣い意味の日本的なるものとなつて居るが、こゝには略することとした。

仁德天皇

この御製は時代から言へば大和時代であるが、新古今集にある

貢ぎ物ゆるされて國とめるを御覽じて

から、こゝにあげた。

高きやに登りてみれば煙たつたみのかまどは賑はひにけり（新古今集賀歌）

百首の歌奉りし時　式子内親王

天の下惠む草木のめもはるにかぎりもしらぬ御代の末々（同）

八月十五夜和歌所の歌合に月多秋友といふことをよみ侍りし　寂蓮法師

寂蓮はじめ俊成の養子となり、後離れた。

高砂の松もむかしになりぬべしなほゆく末は秋の夜の月（同）

前大僧正慈圓

慈圓は僧侶であつて、歌人の聞えも高く、拾玉集がある。

やはらぐる光にあまる影なれや五十鈴河原の秋の夜の月（新古今集神祇歌）

鴨の社の歌合とて人々よみ侍りけるに月を　鴨長明

長明は方丈記の作者。隨筆作家としてすぐれて居り、無名抄その他の歌論書がある。

石川やせみの小河の清ければ月もながれを尋ねてぞすむ（同）

源實朝

源實朝は金槐集

の作者。萬葉派歌人としてすぐれて居る。

慈悲の心を

物言はぬ四方の獣（けだもの）すらだにも哀なるかなや親の子を思ふ（金槐集）

（註）題詠ではあるが實感がある。「すらだにも」にもその強い感動が見られる。

道のほとりに幼き童の母を尋ねていたく泣くを共のあたりの人に尋ねしかば父母なむ身まかりにしとこたへはべりしを聞きてよめる

いとほしや見るに涙も留らず親も無き子の母を尋ぬる（同）

建暦元年七月洪水漫天土民愁歎せむ事を思ひて一人奉向本尊聊致祈念

時により過ぐれば民の歎きなり八大龍王雨やめ給へ（同）

太上天皇御書下預の時の歌

ひんがしの國に我をれば朝日さすはこやの山の影と成にき（同）

山はさけ海はあせなむ世なりとも君に二心我有めやも（同）

武士のやなみ繕ふこての上に霰たばしる那須の篠原（同）。

（註）實朝の勇壯な感情をよく現して居る歌である。

中納言兼光

神代よりけふの爲とや八束穗に長田の稻のしなひそめけむ（增鏡）

（註）大嘗會の御時の歌である。長田狹田は神代に於て見られる田である。

後鳥羽天皇

後鳥羽天皇新古今集の撰定には深く御心を寄せさせられ、歌人としても極めてすぐれてゐらせられる。

奧山のおどろの下も踏分けて道ある世ぞと人に知らせむ（同）

（註）天皇の世に對する御感慨を拜察される。

八百萬神も憐れめ垂乳根の我れ待ちえむと絕えぬ玉の緖（同）

（註）天皇の御孝心を拜察される。

藤原定家

藤原定家は新古今時代の代表的作家。その代の有心の歌風は後成の幽玄體の歌と體ならび稱せられる。

君が代に堰入るゝ庭を行く水の岩こす數は千世も見えけり（同）

藤原良經

藤原良經は新古今時代の歌人。秋篠月淸集がある。太政大臣である。

敷島や大和ことのは海にして拾ひし玉はみがかれにけり（同）

あつたが、若くして不慮の死をとげた。

（註）新古今集撰定の際、歌の集められたことをさすのである。

阿倍宗任

我國の梅の花とは見たれども大宮人はいかにいふらん（平家物語）

（註）武人にして、この風流心ある所に國民性の一面が見られる。

家隆は定家とならぶ新古今時代の歌人。壬二集がある。

藤原家隆

君が代は例もあらじ天地を照す月日の極めなければ

大かたの秋の寐さめの長き世も君をぞ祈る身を思ふとて

（註）家隆の後鳥羽天皇を思ひまつる眞情が見られる。

玉葉集は藤原爲兼の撰。花園上皇の撰定遊ばされた風雅集とならんで新しい傾向の歌集である。

伏見天皇は玉葉集風雅集に多くの歌を收められて居る。極めて御歌にすぐれてゐられた。

後鳥羽天皇

見渡せばむらの朝けぞ霞みゆく民のかまども春に逢ふ頃（玉葉集）

伏見天皇

花よいかに春日うらゝに世はなりてやまの霞に鳥の聲々（同）

寄國祝といふことをよませ給うける

世々絶えずつぎて久しく榮えなむ豊蘆原の國やすくして（同）

永福門院は伏見天皇の皇后、御歌にすぐれ給うた。

永福門院

木々の心花ちかからし昨日今日世はうす曇り春雨の降る（同）

みねの雪谷の氷もとけなくに都のかたは霞たなびく（同）

後醍醐天皇天資英邁にましまし、建武中興の大業をとげたまふ。

後醍醐天皇

建武二年うへのをのこども題を探りて千首の歌つかへまつりけるついでに

題しらず

身にかへて思ふとだにもしらせばや民の心の治め難さを

詠むるを同じ空ぞとしらせばや故里人も月は見るらむ

（註）故里人とは京の人をさすのである。

新葉集は吉野朝時代、宗良親王の撰定された歌集、吉野の君臣の國家を中心とする精神が見られる。

二品法親王深勝

和泉の國萬代別の宮に參籠し侍りける時よめる

民やすく國治まれと祈るかな人のひとより我が君のため（新葉集神祇歌）

後村上天皇は新

後村上天皇

葉集の中に最も多くの歌が選ばれて居り、最もすぐれた歌人であられた。

年中行事の百首の御歌の中におなじ心を

二月や雪まをわけし春日野におく霜月もかみまつるなり（同）

年中行事を題にて人々百首の歌つかうまつりけるついでに朝拜の心を

高み座とばりかゝげて橿はらの宮の昔もしるきはるかな（新葉集雜歌）

題しらず

鳥のねに驚かされて曉のねざめしづかに世をおもふかな（同）

中務卿宗良親王」

宗良親王は後醍醐天皇の皇子、信濃、遠江等に居られて吉野のために盡された。御家集に李花集がある。

東の方に久しく侍りてひたすらもののふの道にのみ携りつゝ征東將軍の宣旨など下されしも思ひの外なるやうにおぼえてよみ侍りし

思きや手もふれざりし梓弓起きふし我身なれむものとは（同）

同じ頃武藏の國へうちこえてこさしはらといふ所におりゐて手分などし侍りし時いさみあるべきよし

つはものどもにめし仰せ侍りしついでに思ひつゞけ侍りし

君のため世の爲何か惜しからむ捨てゝかひある命なりせば（同）

正平二十年内裏の三百六十首の中に寄弓述懐

前内大臣臣

新葉集作者部類には隆資男の藤隆俊歟とある。

君がためわが取りきつる梓弓もとの都にかへさざらめや

楠木正行

楠木正成の子として忠勤をつくす。

かへらじとかねて思へば梓弓なき數にいる名をぞとゞむる（太平記）

五　江戸時代の和歌と日本精神

江戸時代は先づ中世文化の因襲化に對して、古典に歸つて古代日本精神を認識し、その明らかにされた精神をば根柢として、新しく文化を建設しようとするにあつた。元祿時代の文藝復

興はこの精神のもとに起つた。和歌に於ける萬葉精神の復歸もその具體的な現れであつたし、古今派新古今派が萬葉派に對して起つたのもその精神の擴充である。こゝに近世和歌が古典に見られる日本的なるものを中心として居ることが見られるが、更に近世の國學が勤王運動と結びつき、近世後期から幕末にかけて幾多の勤王の士が輩出した。是等の勤王の士は國事に奔走するとともに一面にはその精神を和歌に表現したのであつて、是等勤王精神をよんだ和歌は極めて多いのである。こゝにはさういふ方面を中心として選んで見たい。

戸田茂睡

戸田茂睡は古學復興派の一人。歌にすぐれまた歌論書梨本集がある。

わかの浦にゆきかふ鳥の跡とめて猶も正しき道や求めむ（鳥の跡を選びし時）

（註）「鳥の跡」は茂睡撰の歌集である。

古へにあらすきかへせ言の葉の道は狭くもなりにけるかな

（註）茂睡の和歌に對する熱情が見られる。梨本集による和歌の革新もこの精神から出て居る。

徳川光圀

徳川光圀は徳川家の一人ながら勤王の志厚く、

大日本史を計畫し萬葉集研究を鼓吹した、歌集に常山詠草がある。

ゆく河の清き流におのづから心の水も通ひてぞすむ

今はたゞ書より外の友も見ず昔を語る人しなければ

下河邊長流

萬葉學者にして、萬葉集管見等あり。歌集に晩花集がある。

富士のねにのぼりて見れば天地はまだいくほども分れざりけり

（註）富士山の雄大をたゝへて言つたのである。

契沖

近世國學の先驅者。萬葉代匠記の著がある。歌集に漫吟集がある。

空にみつ大和しまねにふたつなき寶となれるふじのしば山

富士のねは山の君にて高御座そらにかけたる雪のきぬがさ

日本の國をしづめて動きなきふじの高ねのなる澤のいし

荷田春滿

國學四大人の一人。萬葉集、日本書紀の研究を行ひ多くの著書がある。歌集春葉集。

霞

いひしらぬ神代の春の面かげをみせて霞むや天のかぐ山

書

ふみわけよ大和にはあらぬ唐鳥の跡をみるのみ人の道かは

（註）漢學のみを重んじて日本の古典を輕んずるのを慨した歌、春滿の國學を興した精神である。

紫もあけの衣もはえはあれど淸き神路の山あゐの袖

（註）寫實と想像との間をうたつて居る。

のがれても身はおく山の榊葉の榮ゆく世をば祈らざらめや

賀茂眞淵

ふる雨に早苗をうゑて國の名のみつほの秋をまつぞ樂しき

たふときやすべらみことは神ながら神をまつらすけふのにひなへ

もろこしの人に見せばやみよし野のよし野の山の山櫻花

國つ罪はらふ心の涼しきは天に知られぬ秋にぞありける

田安宗武

學ばでもあるべくあらば生れながら聖にてませどそれ猶し學ぶ

天地のめぐみに生るゝ人なれば天の命のまにまにをへや

賀茂眞淵、春滿の弟子、萬葉學者として萬葉考、冠辭考、祝詞考その他著書が多い。萬葉派歌人としてすぐれて居る。歌集に賀茂翁家集がある。

田安宗武は徳川吉宗の第二子。萬葉集を好み、歌集に天降言がある。春滿眞淵は宗武に仕へた。明和八年薨じた。

宇萬伎、靜舍といふ。眞淵の弟子。歌集に靜舍歌集がある。

河津宇萬伎

春霞たたるを見ればくもりし神代の昔おもほゆるかな

世の中のうき人の子をはぐくまむつばさかしてよ天のたづむら

魚彥は下總國香取郡佐原の生、眞淵の門に入り、萬葉風の歌をよむ。天明二年歿す。

伊能魚彥

皇神の天降ましける日向なる高千穗の嶽やまづ霞むらむ

大汝少彥名のつくらしゝ大八洲國は廣らにあつらに

久老は伊勢の人。眞淵の門に入り萬葉考槻落葉がある。

荒木田久老

初春の初日かゞよふ神國の神のみかげをあふげもろもろ

天地の神もうづのへわれなぐば誰か說かむよあたら古語

土滿は眞淵の門。

栗田土滿

おほけなく神代のことを慕ふ間にすぐる月日は又もくれけり

眞潮は土佐の人。賀茂眞淵の學統である。

谷眞潮

夕庭にめし給ふらし沓が緒もかくるゝ雪にまゐる宮人

丈夫やよきもあしきも劍太刀なが心よりなすといふなり

本居宣長

伊勢松坂の人。賀茂眞淵の門人古事記傳を主著とし源氏物語玉の小櫛その他の著多い。歌集鈴の屋集といふ。享和元年歿す。

敷島の大和心を人とはゞ朝日ににほふ山櫻ばな

（註）櫻によつて大和心を現した思想はこの歌によつて最も明らかにうたはれて居る。

たぐひなき櫻の花を見てもしれわが大君の國のこゝろを

汝が國にこの花ありやとから人に櫻を見せて答きかばや

民やすく世をわたらひのいすゞ川そのみなかみのふかき惠みに

本居大平

天地のそこひのうらに行きとほりみたぬ方なき神のさきはひ

（註）「そこひ」は底である。

眞直なるやまと心に學びてぞ神のまことの道は知るべき

たひらけき御代にはあれどもののふの道おこたらぬますら雄のとも

足代弘訓

わが國はいとも尊し天地の神の祭をまつりごとにて

加藤千蔭

江戸の學者、枝直の子、賀茂眞淵の門、萬葉集略解の著があり、歌集に「うけらが花」がある。文化五年歿す。

二見がたこちふく風にあけそめて神代のままの春はきにけり

内日さす宮路の雪にあぢまさの車しづけき朝ぼらけかな

（註）「あぢまさの車」は檳榔でふいた車。

天の原よさしまつれる日の御神照さむかぎり國は動かじ

村田春海

江戸の文人、眞淵の門、歌文に長じ、琴後集がある。

百千々の世にもうごかじ天地の神のかためし大和しまねは

見し世には只なほざりの一言も思ひいづればなつかしきかな

（註）亡き父母を想ふ眞情がしんみりとうたはれて居る。

日の經にふりさけ見れば大君の御門おぼゆる天の香具山

（註）「日のたて」は東の方をさす。萬葉集の藤原宮の御井の歌に「大和の青香具山は日のたての大御門に春山としみさびたてり」とあるのによつたのである。

松平定信

江戸幕府の老中、故實の學に

詳しく、歌文に長じて花月草紙を作つた。

埋火のあたり長閑にはらからの圓居せし夜ぞ戀しかりける

この舟のよるてふ事を夢の間も忘れぬは世の寶なりけり（黒船のかたをゑがかせつる上に）

（註）外國船の我國に來たことをうたつて居る。

小林歌城

くろがねの楯も甲も打くだく此つはものは國の守りぞ

仇守るいくさのきみの臺つく浦賀の湊浪も立ちあへじ

（防海の爲にとて東海のほとりに巨砲多く設けらると聞て）

靈元天皇

後水尾天皇の皇子にまします。古今集序註その他の御著作もあらせらる。

名あるものはやがて雲井にきこえあげよ聞きて吾世の樂びにせむ

隔てなきわが日の本の光をばあだし國まで仰がざらめや

遙なる田のもを見ても遑なき民のしわざの程をしぞ思ふ（修學院に物せさせ給ふ途上にて）

似雲

山里に風靜かなる花見ても治まれる世にすめるうれしさ

咲きにほふ詞の花もあだなれや心を種のまことならずば

（註）心のまことがあつてこそ詞花も意義があるととかれたのである。

伊勢、津の學者。日本書紀通證、和訓栞の著がある。

谷川士清

神風や神代ふりにし五十鈴川とこ世の波の音もゆたかに

天くだるまな井の水の古へも今はかはらじ神のめぐみは

何故にくだきし身ぞと人とはゞそれと答へむ日本だましひ

（註）士清が晩年に原稿等を津の福藏寺の境内にうづめて、反古塚と名づけ、碑にきざんだ歌、彼の精神を見ることが出來る。

上田秋成は學者としてもすぐれて居るが、雨月物語の作によつて殊に注目されて居る。歌もすぐれて居り、藤簍冊子がある。

上田秋成

萬代の國のしづめの富士のねを仰げば空にうつしみの神

小澤蘆庵は京都の歌人、古今集を重んず。歌集としては六帖詠草がある。

小澤蘆庵

蘆原やこの國ぶりのことの葉にさかゆるみよの聲ぞきこゆる

をしからぬ命ながらも足乳根のある世はかくてあるよしもがな

ことの葉は人の心の聲なれば思ひをのぶるほかなかりけり

香川景樹

蘆庵と同じく京都派歌人であつて、古今集を重んじ桂園派を樹立す。誠實即調の立場をとく。桂園一枝がある。

はふり子がとるや眞弓のふして祈り起てそうたふも君が世の爲

うづみ火の外に心はなけれどもむかへば見ゆる白鳥の山

敷島の歌のあらす田荒れにけり荒すきかへせ歌のあらす田

木下幸文

幸文は香川景樹の門人で、同じく景樹門の熊谷直好の溫雅な歌風に對して意氣があり、人生的傾向がある。

大丈夫のをのこさびすと打あげて泣かぬ心ぞまこと悲しき

千早振神のみ國とさだまれるこのおほみくにうごきあらめや

大君のみ世盡きせめや天地の神のみたまのあらんかぎりは

平田篤胤

篤胤は秋田の人、本居宣長の歿後の門人、國學の四大人の一人。歌集を氣吹舍歌集といふ。

玉だすきのふみのはじめによみて添たる

たま襷かけて祈らな世々の祖おやの御祖の神のちはひを

いざ子どもさかしら止めて現人の神に習ひて親を齋かな

孝德天皇紀の大詔命によりて

帝の道たゞ一つことをおきて他し小德によらめやも人

皇神の道な忘れそうつそみの世の業はひのよし繁くとも

武士　伴信友

信友は篤胤と同じく、宣長歿後の門人、考證學にすぐれてゐた

事しあらば君が御楯となりぬべき身をいたづらにくたしはてめや

つかのまも忘れてあらめや劒太刀とりてつかふるますらをの道

富士山

日の本の國のしづめと鳴神もいゆきはゞかるふじのしば山

（註）萬葉集の富士山の歌から來て居る。

立春　橘守部

守部は伊勢に生れ、江戸にて活動す。「萬葉集檜嬬手」、「長歌撰格」その他の著書がある。家集を橘守部家集といふ。

日の本の大き皇國の光よりもろこし人も春をしるらん

國

とつ國はあまたかはれどしきしまの大和しまねのうごく世やある

寄海祝

君が世はおきつしほぢのやほあひのひがたとなりてかちわたるまで

千種有功

千種有條の男。堂上派に屬するが、景樹等に親しかつた。歌集に千々廼屋集がある。嘉永七年歿す。

神祇

廣前にかけてくもらぬます鏡いやます〳〵に仰げもろ人

（註）廣前は神前である。

神如在

誠もて祭らば神はいますべし七つ緒やつ緒よしひかずとも

武威

おほ神のいはへる國のますらをの矢先に向ふ仇あらめやは

寄國祝

天地とたちわかれけむ始めありてはてなきものや葦原の國

加納諸平

諸平は紀伊の人、夏目甕麿の子で、大平の門に入り、加納氏をついだ。歌に長じ、柿園詠草がある。

姫島の松の夕日に雁鳴きてわが子こひしきあき風ぞふく

（註）亡兒を愛する情をうたつた歌。

みづちすむ淵を千尋の底に見て太刀の緒かためゆく山路かな

土佐の萬葉學者。萬葉集古義の大著がある。歌集を山齋集といふ。

鹿持雅澄

日の本の　やまと島根は　天地の　神のみことの　よろしなへ　かためし國ぞ　今更に　何か思はむ　さかしらの　しこわざせめや　およづれの　たはごといはめや　天地の　神のまにまと　劒太刀　とぎし心を　梓弓　ふるひおこして　大ぎみに　つかへまつらむ　ますらをあれは

月前祝

君が代の長五百秋を斯くしつゝ淸き月夜に樂しく遊ばめ

九州熊本の藩士。語學や考證に委しかつた。家集に櫨園集がある。

中島廣足

事しあらばふみで打ちおき老人もつるぎのたがみ取りしばりてむ

うら安の國ぶりうたふ民の聲四方ににぎはふ君が御代かな

備前の歌人、萬葉派歌人。奇行に富む。彼の歌を集めたものに平賀元義集がある。

平賀元義

嘉永七年正月元日此の春は亞墨理加の賊來るよし女童どものいひ騷ぐを聞きて

えみし等を討ち平げて勝鬨の聲あげそめむ春はきにけり

西の戎ども攻め來る由女童どもの云ふをきゝて

えみし等は知らずやありけむ靈ちはふ神と君とのいます此の國を

或武士の手負ひたるが歌乞ひければ

鎌倉のますら健男は眼に立ちし矢をさへ抜かで仇を取りけり

からふねを

大君の御稜威かがやく日の本に狂業するな癡の漢人

橘　曙覧

福井の歌人、愛國の熱情にとむ歌が多い。萬葉派歌人。歌集に志濃夫廼舍歌集がある。明治元年歿す。

公につかふまつるつねの心おきてとなるべき歌よみてくれよと人に乞はれて

世の中の憂きに我身を先だてゝ君と民とにまめ心あれ

贈正三位正成公

湊川御墓の文字は知らぬ子も膝折ふせて嗚呼といふめり

（註）光圀の楠公崇拜をうけて、この歌をよんだのである。

朱舜水

さくら咲く皇國うれしく思ひけむさつ矢遁れて來つる唐鳥

たのしみはゑびす喜ぶ世の中にみ國忘れぬ人を見るとき

　　をりにふれて詠みつゞけける

いかで我きたなき心さりさりて神とも神と身をなしとげむ

　　今とし父の三十七年母の五十年のみたままつりつか
うまつる

顯はさむ御名はかけても及びなし身の恥をだに殘さずもがな

　　伊勢大宮

神樹葉の蔭ものふかき五十鈴川骨身にしみて淸し尊し

　　示　人

君臣品さだまりて動かざる神國といふことを先づ知れ

　　內宮にまうでて

おはしますかたじけなさを何事も知りてはいとゞ淚こぼるる

　　山室山にのぼりて鈴屋先生の御墳拜みて

おくれても生れし我か同じ世にあらば履をもとらまし翁に

赤心報國

眞荒男が朝廷思ひの忠實心眼を血に染て燒刄見澄す

國のため念ひ瘦せつる膓を筆にそむとて吾世ふかしつ

仇に向き腕たゝきけむ古人にならひてこそは國に仕へめ

正宗の太刀の刄よりも國のためするどき筆の鋒揮みむ

國を思ひ寢られざる夜の霜の色月さす窓に見る劍かな

國汚す奴あらばと太刀拔て仇にもあらぬ壁に物いふ

松葉の夜おつるにも耳たてつ枝ならさゞる世とはおもへど

示人

天皇は神にしますぞ天皇の勅としいはゞかしこみまつれ

天下淸く掃ひて上古の御まつりごとに復るよろこべ

大隈言道

福岡の歌人、歌學者。歌集に草徑集等がある。

さく花に遊ぶを見れば鳥だにもはむ事のみは思はざりけり

歌論書には「ひとりごち」がある。明治元年殁す。

秋田家

秋の日はうらゝにさして里々の籾する音のゆたげなるかな

里人の俵ごしらへひまなきに共に群れたるむらすゞめかな

ある時

死出の山こえこえてゆくさきまでもわが敷島の一すぢの道

野村望東尼

九州福岡藩の勤王女歌人。歌集に向陵集がある。慶應三年殁。

また國臣が「忍びつゝ旅立ちそむる今宵とて山かげ淡き宿りをぞする」といひ出でたれば

ひとすぢにあかき道ゆく中やどにかして嬉しき山のあれ庵

（註）　勤王の士を望東尼はその向陵の山荘に迎へた。それをうたつたのである。

あかつき方に出立つ時に

をしからぬ命ながかれ櫻ばな雲居に咲かむはるを見るべく

久方の照る日のもとのうき雲を吹きはらひませ伊勢の神風

たましひ

誰が身にもありとは知らでまどふめり神のかたみの日本魂

大國隆正

幕末の勤王の士、ならびに國學者。

人

神代より君と親とに從ひてかたみにすくふ秋津島人

朋友

たすけつゝ助けられつゝいつまでも違はぬ友の賴もしきかな

誠

天地をつらぬくものは人ごとにもちて生れし誠なりけり

述懷

親のためつねは惜しみて事しあらば君ゆゑすてむ命なりけり

おやの爲をしむ命を君の爲捨つべき時にすつべかりけり

かばねはも草むせ水づけ國のため心のぬぼこ通さゞらめや

（註）「ぬぼこ」は瓊矛である。

太田垣蓮月

京都の女歌人。

勤王の志あつかった。歌集に「海士のかる藻」がある。

身は賤しくとも心の清からむ事を思ふ

形こそまがりてみゆれ山賤の心と鎌は研ぎすましてむ

男子におはします人のうらやましければ

弓矢とり太刀さげ佩きて來ん世には君につかへむ身にうまれてむ

勤王の志士。

高山彦九郎

題しらず

我れをわれと知しめすかやすめらぎの玉の御聲のかゝるうれしさ

題しらず

すみて居る深き心を山の井の淺くや思ふ人の世の中

彦九郎と同じく、勤王の志あつく、山陵の研究に深かつた。

蒲生君平

君の爲國の爲とし思はずば雪も螢もなにか集めむ

折にふれて

水戸の儒者。正氣の歌をはじめ、熱烈な情があふれて居る。

藤田東湖

かきくらすあめりか人に天つ日の輝く國の手ぶり見せばや

信濃、松代の勤王の志士。科學的智識に深かつた。

佐久間象山

すめろぎの御門かしこみいつくしと思ふこゝろは神ぞ知るらむ

勤王の僧。

月照

大君の爲には何か惜しからむ薩摩の瀨戸に身は沈むとも

幕末の勤王の士。松下村塾に志士を養成した。三十にて歿した。

吉田松陰

獄中の作

かくすればかくなるものと知りながら止むにやまれぬ大和魂

七たびも生きかへりつゝえみしらを攘はむ心われ忘れめや

身はたとひ武藏の野邊に朽ちぬとも留め置かまし大和魂

國臣は九州の勤王の士。獄中、歌をよみ、文を書いた。平野國臣歌集、囹圄消光がある。

平野國臣

斯くばかり惱める君の御心を安めまつれや四方の國民

數ならぬ身にはあれども希はくは錦の旗のもとに死にてむ

鹿兒島に入りて同志と語らひけるに事成らざりければ

我が胸のもゆる思ひにくらぶれば煙はうすし櫻島山

伴林光平

河内の人。南山の義挙に加はり、南山踏雲録を著した。歌集に笹廼屋之百首がある。

事しあらば誰か命を惜しむべき君が恵みにしげる夏草

大君の醜の御楯と身をなさば水漬く屍もなにかいとはむ

辭世

君が代はいはほと共に動かねば砕けてかへれ沖の白波

ますらをの屍くさむす荒野らに咲こそ匂へ大和なでしこ

佐久良東雄

常陸に生れ雨引山の恵岳の影響をうけた。蘆園歌集がある。勤王の志厚かつた。

題しらず

すめろぎに仕へまつれと我を生みし我が垂乳根は尊くありけり

命だに惜しからなくに惜しむべきものあらめやも皇の爲には

事しあらば我大君の大みため人もかくこそ散るべかりけれ（落花を見て）

君がため朝霜ふみてゆく道は貴とく嬉しく悲しくありけり

武田耕雲齋

しづたまき數ならねども大君のうさをばいかで晴らさゞらめや

君がため誠の道やつくさなむありて甲斐なき我が身ながらも

天皇の御楯となりて死なむ身の心は常に樂しくありけり　　鈴木重胤

くろがねの楯にありとも向き立たば射て通さなむ益良夫我は

幕末の國學者で勤王の志が厚かつた。日本書紀傳、祝詞講義の著書がある。

六　明治時代の和歌と日本精神

明治時代になつても二十年代の半ばまでは近世和歌の繼承として御歌所の歌が中心であつたが、二十年代の半ばに落合直文等が新しい和歌を主唱してから、所謂新派和歌が起り、その流れから與謝野鐵幹、晶子氏等の明星派が出で浪漫的な和歌が唱へられ、尾上柴舟、金子薫園氏等の歌もこの流れをくんで居り、佐佐木信綱氏の歌も浪漫的に近い。一方に正岡子規による寫生短歌はこれに對立するものであつたが、伊藤左千夫、長塚節等によつて一層その立場は完成していつた。さうして明治和歌を通して明治天皇の御製、昭憲皇太后の御歌は高

い輝きをなすものであつたし、また日清、日露の戰役等によつて國家的精神が鼓舞されることも大きかつたのである。こゝにもさういふ歌を選んだ。新派の起つてからの歌はさういふ方面を比較的多くよまれた數人の歌人の歌を擧げるに止めた。

明治天皇

曠世の英明の天皇にましますのは言ふまでもなく、また歌人としても極めて卓越しましました。

新年雪

田に畑に雪ぞつもれる民の爲ゆたかにと思ふ年の始に

新年祝

あしはらの國のさかえを祈るかな神代ながらの年を迎へて

秋　祝

ことしげきこの秋にしも千町田のみのりよろしと聞くが嬉しさ

しぐれして寒き朝かな軍人すすむ山路は雪やふるらむ

古　典

いそのかみ古事記（ふることぶみ）をひもときて聖の御代のあとを見るかな

しきしまの大和心のををしさはことある時ぞあらはれにける

昭憲皇太后

落梅

みそなはすひまだになくて御園生の梅は惜くも散りはてにけり

寄花述懐

たらちねの今もいまさば大御代の盛の花も見せましものを

木曾路に行幸まし〳〵けるころ朝霧のたてるを見て

大宮のとばりもしめる朝霧に君がこゆらむ山路をぞおもふ

洋學

外國のふみのはやしの下風になびきなはてそやまとなでしこ

誠

君がため心をつくすまめ人は神も嬉しとたすけますらむ

明治天皇を御助け申上げて、明治の大御代を實現された。また歌にすぐれさせ給うた。

八田知紀

薩摩の藩士、香川景樹の門人。古今風の歌をよむ、千代の古道等がある。歌集に「しのぶぐさ」がある。

まこともてまじはる時は天の下わが友ならぬ人やなからむ

大君の千代と共につもれるはかひの白根のみ雪なりけり（大嘗會悠紀 白嶺甲斐國）

おろかにも我ものとやは思ふべき君が御楯と生れてし身を（忠）

井上文雄

江戸の人、岸本由豆流に學ぶ。歌集に調鶴集がある。明治四年歿す。

言だまのさきはふ國の道といふ道はすなはちしき島の道（寄國祝）

えみしらにときてさとしてきかせなばなどかならんやまと魂

日の本のやまとだましひかためつつさてからざえも學ぶべきかな

（註）和魂漢才の精神である。

高崎正風

薩摩鹿兒島の藩士、知紀の門人。御歌所長の職に長くあつた。歌集を「たづかね集」といふ。明治四十五年歿す。

水莖のあとは鏡にあらねども君が千年のかげぞ見えける

大君のみをしへ草をしをりにてさきだちし子を何かなげかむ

子故には泣かぬ袖をもぬらしけり國のははそのもりの雫に

御歌所に奉仕した人。

黒田清綱

天つ日のもとつ御國の大みいつ今こそ四方にかゞやきにけれ（寄國祝言）

大君のみことかしこみ老が身もたふれむかぎり仕へまつらむ

明治初期のすぐれた女流歌人。宮廷に奉仕す。歌集を御垣の下草といふ。

税所敦子

九重の萩の錦はいかならむ庭のすすきも穂にいでにけり

千早ふる神代をきけば大空もみなすべらぎのみ國なりけり

明治の政治家。歌道にも深かつた。

山縣有朋

國のため君のためにと一すぢにつくすこゝろは神ぞしるらむ

すめらぎの千代よろづよとよばふなる聲の中ゆく日の大御旗

みそなはす大御心やいかならむかちてかへりしみいくさ人を

おほきみはいかにますらむ伏見山たゞ松風のおとばかりして（桃山御陵に參拜して）

明治の國文學者で、同時に新しき和歌を鼓吹した。

落合直文

父君よ今朝は如何にと手をつきて問ふ子を見れば死なれざりけり

事しあらば君が御楯とならむ身のなど斯くばかり痩せ果てぬらむ

春日神社に詣でて

國を思ふこころの色にくらべ見む春日の森の朱の玉垣
まどろまば夢にも父の見ゆべきに心無く吹くさ夜あらしかな

佐佐木信綱

佐佐木弘綱の男、歌學者、歌人。

父の子ぞ母の愛子ぞ御軍によわき名とるな我が國のため
ひむがしの海にかゞよふ朝日の國光の國の吾が大君はも（奉頌明治天皇）
皇祖の創らしし國をいやひろにいやかためましつ吾が大き帝

正岡子規

俳諧、和歌に寫生主義を以て新しい立場を唱へた。

ちはやぶる神の御代より日の御子のいやつぎ〳〵にしろしめす國（日本の國を）
千年ふる朱の忌垣に苔蒸して賀茂の社は神さびにけり

車

あきつ神わがおほぎみのめし車くもゐのみ橋いわたらす見ゆ

天長節

天の下しらす日の御子その御子のあれましし日は常晴にして

伊藤左千夫

正岡子規の門人。豪快にして、沈痛な歌が多い。

鎌倉懷古

燒太刀のほさきかませる皇子の御面偲ばゆ岩屋をろがめば

あだつ國蒙古の使時もおかずはや打ち斬れとたけびけむかも

元の使者すでに斬られて鎌倉の山のくさ木も鳴りふるひけむ

たぐひなきいさを立てて し時宗の奧津城どころ知人もなし

神武天皇祭の櫻花を詠める

橿原の大宮まつるけふなれば八島國はら花咲きにけり

國はらを花の八重雲たちなびく天の足日にまつりおこなふ

東宮御巡遊の歌

高しらす照る日の御子が直土に道ふますかも越の山河

朝宮につかへまつると夜一夜雨にあみけむ青葉みづやま

尾上柴舟

歌人ならびに國文學者。書家としても名がある。

大御代の榮しるしも廣芝のうへの大空雲もあらなく
神ながら神さびせすとわが大君冬の御苑に駒みそなはす

紀元節の朝

み民われら守らであらめや大帝今日建てましし大和の國ぞ
うつゆふの狹き國なれど大やまとあきつ島人心ひろらに
光滿つ路伐りひらき細戈千足の國の名にそむかめや
ゆらぐべき日はなからめど御民われら止まず堅めむ大和島根を

日本精神歌集　終

昭和十年二月二十一日印刷
昭和十年二月二十二日發行
昭和十四年三月三十一日再版

日本精神叢書 八

教學局

印刷人 東京市京橋區木挽町一ノ廿一
小松代浩三

印刷所 東京市京橋區木挽町一ノ廿一
特急印刷社
電話京橋一八八〇番

日本精神歌集